

転換期を迎えつつある大阪大学のキャンパス計画



夢はバラ色

吉岡 聡司*, 池内 祥見**

A Turning Point of the Campus Planning in Osaka University

Key Words : Campus Master Plan, Spatial Frame-work, Public Private Partnership

1. はじめに

社会全体で国際化や国際競争力の強化が謳われるなか、キャンパス計画にも高いレベルの空間計画が求められるようになり¹⁾、さらに大学間競争に勝ち抜いていくためにも、学生だけではなく地域の人々からも愛されるキャンパス、あるいは地域力の向上に寄与するようなキャンパスや大学像が求められるようになってきています²⁾。

キャンパスは教育研究の基盤であるばかりか、課外活動など学生教職員による多様な活動の場、リフレッシュや交流による相互の刺激を生むようなCOMMONスペース、あるいはキャンパスライフの基盤、さらに学生教職員の創造性をのばすフィールドとして、その重要性は高いと言えるでしょう。また空間的に豊かなキャンパスには、大学の評判 (reputation) を大いに高める効果もあります。

その一方で、国や大学の財政状況は厳しさを増し、

キャンパスを維持し発展させていくこともより困難になりつつあります^{注1)}。大阪大学のキャンパス^{注2)}には、都市 (郊外住宅地) における貴重で広大な緑地も多く存在し、その維持管理は容易ではありません。

筆者らは、キャンパスの資産 (土地、建物、自然資源等) を最大限に活かしながら、学生教職員の活動をできるだけ高められるようなキャンパスの構築や再生を考え続けています。

本稿では、転換期を迎えつつある大阪大学のキャンパス計画をとりまく状況についてご紹介します。

2. キャンパスマスタープラン2016改訂³⁾

2004年の国大法人化の後、全学キャンパスの考え方をまとめた大阪大学キャンパスマスタープラン (以下でCMP) は2005年に策定され、大学としてその整備方策を自律的に計画していくこととなりました^{注3)}。

その後、耐震改修やCOMMONとしての主要なオープンスペース、あるいは福利厚生施設を充実させる整備等を行いつつ、2012年にはCMPの部分改定が行われ、そして2016年12月に筆者らはCMPの全面改訂を行いました。

この改訂では、省エネ・省資源に限らない広義のサステナビリティ (持続可能性) に関する記述と、民間企業の誘致等いわゆるPublic Private Partnershipの視点や、学生教職員と協働していく方針等を要点としています。こうした協働等を引き出していくために、リーディングプロジェクト、すなわち優先的に整備するべき諸計画を概略方針としてCMPの中に数多く示しています。

これに関連して2018年1月現在、未だ不十分なキャンパス計画としての広報戦略の強化も、CMPのダイジェスト版の作成とともに検討しているところ です。



* Satoshi YOSHIOKA

1969年7月生まれ
大阪大学大学院 工学研究科 建築工学
専攻 博士前期課程修了 (1995年)
現在、大阪大学サステイナブルキャンパス
オフィス キャンパスデザイン部門 准教授
TEL: 06-6879-4484
FAX: 06-6879-7139
E-mail: yoshioka@arch.eng.osaka-u.ac.jp



** Yoshiaki IKEUCHI

1982年4月生まれ
大阪大学大学院 工学研究科 ビジネス
エンジニアリング専攻 博士前期課程修
了 (2007年)
大阪大学大学院 経済学研究科 経営学
系専攻博士前期課程修了 (2008年)
現在、大阪大学サステイナブルキャンパス
オフィス キャンパスデザイン部門 助教
TEL: 06-6879-4479
FAX: 06-6879-7139
E-mail: ikeuchi@arch.eng.osaka-u.ac.jp

3. 「緑のフレームワークプラン」の改訂

CMPの下位指針として2011年に大阪大学 緑のフレームワークプラン (GFWP) を策定しましたが、これはその時点では維持管理の手法に重きを置いたものでした。

CMP2016に続いて目下検討している GFWP 改訂では、学生教職員の活動とも一体となった「国立大学でもっとも美しいキャンパスのランドスケープ (風景・景観)」の構築を目指して、使いこなしながらよくしていく発想のもとに (図1)、下記のような事業計画の柱を立てようとしています。

- (1) 各所のランドスケープ (風景、景観) と安全上の改善
- (2) 多様な学生の活動を支援するフィールドの整備
- (3) 学生教職員と共に実施するキャンパス共用空間の維持管理活動と、関連するイベント等の支援



図1 キャンパスを使いこなしながら改善していく考え方

こうした考え方の一つのモデルとした、豊中キャンパスでのタケの会を通じた緑地の維持管理活動 (図2) や関連するイベント (図3)、それと連動した外部空間整備は、外部からの複数の賞を受賞し、文部科学省からの業務実績評価でも注目されています^{注4}。

「活動」こそがキャンパスを作り上げていくのだ、ともいえるでしょう。そうした萌芽は他にもいくつか見えてきています (図4)。こうした活動を、サイクルとして廻していくことが必要であると考えています (図5)。



図2 豊中キャンパス「タケの会」の活動風景と収穫されたタケノコ



図3 タケを使った流しそうめんイベントの様子 (阪大坂) 経済学研究科のゼミとも連携して学生が主体となり実施している



図4 学生による吹田キャンパスでのカフェの「実験」 工学研究科BE専攻の研究室と連携し学生主体で実施している



図5 活動と維持管理を結びつけるサイクルの考え方⁴⁾

4. 福利厚生や課外活動の施設計画

これらの施設は教育研究との関係性の説明が難しく、国による予算化のハードルが特に高いため、これまで後回しになりがちでした。食堂の改修や新築はこの5年程度の間にある程度進みましたが、特に課外活動施設は著しい老朽化が指摘されていました。

平成28 (2016) 年度に筆者らは、学生に対する詳細調査を行いつつ、緑のFWPと同様に学生教職員の活動に最大限に適合し、しかも民間企業や篤志

家の協力を得やすくする意図をもった計画をまとめ、大学執行部からの概略方針への賛同を得ました。これらの計画は、キャンパスマスタープランのリーディングプロジェクトの一部として対外的に公表していくことで民間企業の参入意欲を高め、また幅広い寄付やネーミングライツ等を募る仕組みにつなげようとしているところです。以下に特徴的な計画をいくつかご紹介します。

(1) 豊中キャンパス学生交流棟の改修・機能強化

いくつかの理由からこれまで十分に機能していなかった1F カフェテリアを、ピーク混雑緩和と食の多様性の両面で有効に機能させることと、閉鎖的な使われ方がされていた2Fを学生のワンストップサービス拠点やcommonsとして、親しまれ使ってもらえる空間とすることを意図した改修であり（図6）2018年度の実施が決定しています。



図6 学生交流棟（カフェテリア「宙」）の改修・機能強化のイメージ
特に1Fと2Fの一部分を透かした表現としている

(2) 豊中キャンパスのプレハブ食堂跡地の屋台村運用
前項の機能が改善されることで、老朽化が進んだプレハブ食堂（DONDON）は解体が可能となります。食の多様性の向上とともに、学生の交流を促進できるような運用が期待されています（図7）。



図7 プレハブ食堂跡地の屋台村としての運用のイメージ

(3) 豊中キャンパス第三体育館

2016年度の詳細調査からは、プールの相対的ニーズの低さと体育館の重要性が明らかになりました。現プールを解体してその跡地に第二体育館と同規模の体育館ならびに老朽化が著しい体育会部室等の機能を合築しようとするものです。寄付金投入やネーミングライツ導入等も含めた検討が行われる予定です。

(4) 阪大坂下へフィットネス施設を誘致する構想

旧石橋宿舎の跡地は、駐車場として暫定使用されていますが、この場所に民間事業者による建設を期待した検討を行っており、プールも含めた建設に十分な実現可能性があると考えています（図8）

図8 阪大坂下への誘致を構想しているフィットネス施設のイメージ
（図の左下方向が阪大坂）



(5) 吹田キャンパスの課外活動等施設

豊中グラウンド周辺への活動拠点の集中を緩和することを目的とする計画や、先に述べたGFWPとも連動する計画を立案しています（図9）。

これらの他にも、吹田キャンパス千里門を店舗誘致とともに景観整備する計画（図10）、キャンパスの中での福利厚生アンバランス解消の検討（図11）や、あるいは文系サークルへの対応、箕面キャンパス移転に伴う対応の検討も行っています。



図9 犬養池東側調整駐車場周辺への課外活動施設設置やランドスケープ改善のイメージ



図 10 千里門周辺への店舗誘致と交差点周辺およびランドスケープの改善計画イメージ



図 11 福利厚生者のアンバランス解消提案
(左；旧基礎理学センター（豊中）跡地、
右；吹田キャンパス北部への店舗誘致)

5. おわりに

毎年一定の予算投入が見込めた時代ならば、ロードマップを伴う「計画的」手法が有効だったでしょう。しかし今は、大きな理念を示しながらも、学内の多様なニーズをくみ取りながら多彩な構想を立案して（数打てば当たる式ともいえますが）、多くの主体に示していくことで、それらの実現性を図りながら計画を具体化させる、といった柔軟な手法が重要になりつつあると考えています。

そして民間企業、学生教職員や篤志家との協力をこれまで以上に進めていくためには、キャンパスのことをもっと知ってもらう広報や対話の姿勢、キャンパスへの愛着を活動の中で醸成していく視点が欠かせません。

さらにまた、施設部や他の部署との教職協働のなかで、キャンパスの資源・資産活用に対する大学のガバナンスを強化していくことも必要です。

ご紹介した計画等には施設だけでなく組織体制の整備も必要となり、一部を除き2～3年で実現できるものではありません。柔軟に更新を繰り返しながら10～20年かけて推進する必要があるが、かつ全てを達成することは困難でしょう。

大阪大学のキャンパス計画は、お示ししたもののほかにも、箕面キャンパスの移転・新キャンパス整備⁵⁾や、将来の病院再開発構想、あるいは省エネ・

省資源や防災への取り組みもあり、今まさに大きな転換期を迎えながら、壮大なチャレンジを続けているところです。

注1 文部科学省でも第4次国立大学法人等施設整備5か年計画において、都市のコンパクト化とも軌を一にするかのように、施設総量の抑制と長寿命化の方向性を示している。

注2 大阪大学は、全学の1年生が学び大学の歴史が感じられる豊中キャンパス、多くの研究機関や附属病院を擁する吹田キャンパス、2007年に旧大阪外国語大学との統合によって位置づけられ、今まさに新キャンパスへの移転の実施設設計が進められている箕面キャンパス、都市型キャンパスとしての新たな発展が期待される中之島センター等を擁し、その敷地面積は約160万m²、床面積は約100万m²、学生数は23,000人を超える。

注3 法人化後、大学として自律的にキャンパスの全体像を構想する必要性から、2005年にキャンパスデザイン室と施設マネジメント委員会が設置され、施設部と協働していく体制ができた。また2017年4月にキャンパスデザイン室は、環境・エネルギー管理部と合わせて、総括理事・副学長が室長を務めるサステイナブルキャンパスオフィスに統合され、その一翼であるキャンパスデザイン部門となった。

注4 中山池周辺の整備は2012年に豊中市「第7回 都市デザイン賞」を受賞。タケの会を中心とする活動は、2013年に大阪府「第3回 みどりのまちづくり賞（大阪ランドスケープ賞）」奨励賞を受賞し、2013年度の業務実績評価においても文部科学省から、本学における注目される実績の一つに挙げられている。またこれら活動の発展形として、2017年にはサステイナブルキャンパス推進協議会「第3回 サステイナブルキャンパス奨励賞」を受賞した。

参考文献

- 1) 日本学術会議 編：（提言）我が国の大学等キャンパスデザインとその整備システムの改善にむけて、2017.9
- 2) 日本建築学会 キャンパス・地域再生WG編（文責：齋尾・吉岡）：情報交流シンポジウム第21回 大学が支援する地域再生の現場（活動報告）、季刊 文教施設 第68号、pp52-57、2017.10
- 3) 大阪大学施設マネジメント委員会 編：大阪大学キャンパスマスタープラン2016、2016.12
- 4) 池内祥見・吉岡聡司：大阪大学の竹やぶにみる竹林をフィールドとした大学と地域の連携のあり方、日本建築学会大会 学術講演梗概集（選抜梗概）、pp.73-76、2017.8
- 5) 吉岡聡司・池内祥見：大阪大学箕面新キャンパス整備・移転計画ならびに箕面市船場地区におけるまちづくりへの期待と課題、日本建築学会大会 学術講演梗概集（選抜梗概）、pp.49-72、2017.8